

# 幕と壁の向こう

梅屋 潔（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

## I.

その男は垂れ幕で隔てた小屋の向こう側に消えてゆき、ジャコウネコのものでらしい毛皮を出してきた。それを首に巻くと、クライアントに何か囁いた。子供が長く患っていてよくなるないので、原因を知りたい、というのがクライアントの相談だった。私の耳元で連れのオマディアが英語とパドラ語で通訳を始めた。どうも、占い料金の交渉をしているらしい。クライアントが1000シリングだと、ジャスイエスイ（呪医）の表情が曇った。村の生活で1000シリングは大金だ。クライアントは切迫していたようで、しぶしぶながら払おうとする。結局3000シリング払ってはじめて、儀礼は開始された。男は両手でふたつの瓢箪のがらがらを打ちならしながら口笛を吹く。突然ぼろりと瓢箪を落とす。続いて貝殻にあいた穴に向かって何かしゃべりかけている。貝殻の中をのぞき込んだり、穴に棒をつっこんで耳に近づけたりしているうちに「ジュオギ・オンティエ・カ（死霊がここにいるよ）」と囁いた。クライアントの顔色が変わった。「ンガ（誰）？」男は、おまえはそれを知っているだろう、というかのようにクライアントのほうを見ていた。「オビオ！」クライアントには、オビオ（双子の年長男子につけられる名前）という名のオミン（B, BWB, MBS, ZHZH, MZSを指す親族名称）がいた。早く死んだのだが、ちょうど天候不順でシコクビエがよく育たず、埋葬後行すべき儀礼が行われていなかったという。オマラ（双子が生まれてから4番目に生まれた男子の名前）という名のクライアントは、ジャスイエスイに聞いた。「儀礼をやらなければならないか？」「いまやらなければ、子供は死ぬ。おまえはティーチ（義務）を怠ったのだ」。霊を呼び出す準備が始められた。

## II.

男の名前はオティンガという。彼も弟もジャスイエスイだがオティンガのほうが強力だ、とある村のひとが耳打ちしてくれた。彼が属しているサミアのゲミ（クラン）は、もうずっとむかし「カクングルがこのブケディに攻め入らずとまえに」サミアの地からこのパドラの地に移ってきた。カクングルというのはサー・ハリー・ジョンストンにそそのかれて東ウガンダを制圧したガンダの武人である。オマディアによれば、オティンガは三人の妻と子どもたちと、ほんのちいさな畑を耕し、ジャスイエスイとしての謝礼で生活している。

そこからみた大きさから単純に推定すると、小屋は壁でふたつに仕切られているようであるが、向こうへの小さな入り口は、幕で覆われている。着替えも向こうでしていたようだからだ。広いはずだ。目を凝らすと彼のこの儀礼小屋のなかには、不思議なものがたくさん並んでいる。葉

の空き瓶のようなものにつまった木の根っこか枝のきれはし、大小さまざまな大きさのタカラガイ、猛禽類と思われるトリの足、センザンコウの皮、ハリネズミの死骸、山羊の頭蓋骨、錦蛇の皮、レイヨウの角など。その中に混じって日本で見慣れたものもある。日本製の空き缶や日本製の飲料水の空き瓶にまじってカップ麺の容器が伏せてある。メイド・イン・ジャパン。クライアントから受け取った3000シリングが、そのカップ麺のしたにうやうやしくおさまられた。説明によると、霊の世界へ支払いをするためのツールだという。それ以外にも、個人的にずいぶん見慣れたものを見つけた。切れて使いものにならないので、数ヶ月前に自分の住む小屋の脇に掘ったゴミ穴に捨てた私のベルトが、小屋の中心の柱に大事そうに巻き付けてある。

「霊を呼び出すから」と促されて立ち上がり、目をつぶる。瓢箪の音がやんで暫くすると壁のむこうで、ドン、ドン、ドン、という足音のような音に続けて、じゃらん、というガラスかタカラガイのようなものが落ちる音がした。壁の向こうから怪しげな声がする。「ヨガ！ジョパドラ！インティエ・ネディ？（こんには、パドラの人たちよ、どのようにしていますか？）」「ウンティエ・マペール（元気にしています）」「カーリ、マ・ペチョ（そうか、家のものは？）」「ペチョ・ペール（元気です）」連れのオマディアは、その霊の声と挨拶を交わしていた。目は瞑って下を向いている。ここに来る前は「イ・ミト・カド・パ・ジャスイエスイ？（呪医のところへいくって？）」と、ばかにしたようににやにやしていたが、神妙そのものである。やはりウィッチクラフトは怖いのだ、という。オビオのジュオギ（死霊）とのネゴシエーションは、はじめに出た若者の霊では手に負えないらしく、つぎつぎに違う霊が呼び出された。同じように足音がするが、重量感やリズムが違う。たとえば、女性の霊の場合、とん…とん…とん…しゃらん、という感じの抑制が利いている。凝っている。声まで違う。私は最初、腹話術だと思っていたが、ついにはその確信を得られなかった。若者の霊、女性の霊、最後には「ビッグ・ボス」という最強の霊が別々の声で現れた。私にはわからなかったが、挨拶のときや受け答えのレトリックで、偉さがすぐわかるのだ、とオマディアはいう。出てくるなりオビオのジュオギとの交渉を済ませ、あっさりクライアントの問題を解決した「ビッグ・ボス」は、私の存在に関心を示したらしい。「ムズングよ、おまえはこれから困難に立ち向かわなければならないだろう、だからな、守護霊をつけてあげる。10000シリング出しなさい、守護霊がトランスポートを求めている」霊に交通費がかかるのか。たぶん、それはこちらのへりくつなのだろう。「それから、この次来るときには、今日撮った写真のコピーを持ってくるように」話されているのはサミア語らしい。近くにいた友人オシンデの口添えもあって、私は、当時の感覚からすると過ぎたガーディアンをつけてもらった。それは役目を果たすと消えてゆくという。

写真を撮ろうと小屋から出ると、小屋の向こうから、3、4人見知らぬ人たちがぞろぞろとフレームにはいつてきた。あの霊の声の使い分けはひとりで作るのは無理だろうと思っていたから、妙に納得してしまった。写真の魅力の前には裏方には徹しきれなかったということか。しかし、本当に壁の向こうには彼らがいたということなのだろうか、という疑問を私は思わず飲み込んだ。



小屋の外で写真撮影に応じるジャスイエスイとその仲間

### Ⅲ.

ひとしきり見学させてもらったあと家に帰ると、兄弟ぶんのワンデラが、渋い顔をしてやってきた。「ジャスイエスイのところへ行ったんだって？まさかとは思うけど…信じてるんじゃないだろうね」「そんなことはないさ」彼は最寄りの診療所で、「ドクター」と呼ばれるメディカル・アシスタントである。「でもこの間、ウィッチクラフト・アキュゼーションがあったとき、一番こわがってたのはだれだっけ」「あれは、ジャロ・ジャジュオキ（毒や呪物を用いたソーサリー）だ。毒は怖いよ…ところで、カンパラにはいついくんだい、ちょっと買ってきてほしいものがあるんだが」

久しぶりにカンパラで、ニュー・ヴィジョン紙に目を通す。新型のトヨタや携帯電話の広告の裏にちいさな記事を見つけた。「エンテベでウィッチクラフトを行ったかどで、女性を一名逮捕」「カリモジョンのレイディングで、カタクウィ住民ムバレまで避難、ムセベニ大統領、政府軍の派遣を検討中」

「ユメヤ、待たせたな」カリモジョンの友人ロバート・マリंगाが、携帯を片手に現れた。久しぶりだ。「また、レイディングだよ、ほら、君の同胞ときたら」マリंगाは、そりゃそうさ、という顔をして、「日本にも牛はいるのかい、もしいるとしたら、それも全部われわれのものだ、われわれは自分たちのものを取り戻しているに過ぎないんだよ」「…」私がマーカーでつけていた印をみて、「ウィッチクラフトよりはいいと思わないか？」「…」その夜、われわれが少しの時間を過ごしていた場所で手製のものらしい爆弾を用いたテロがふたつあった。時間的にいうとわずかの差だった。知ったときには、おもわず冷や汗が出た。

#### IV.

村に帰ってすぐ、オティンガを尋ねた。すんでのところ爆弾テロから逃れたのが、彼のガーディアンのおかげだと思ったわけではない。それにかこつけてまた気になる壁の向こうについて聞いたかったのだ。オティンガが瓢箪の音と口笛で呼び出してくれた若者の霊は、爆弾についてはどうだか知らない、といった。「ビッグ・ボス」に聞いてほしいというと、かれは別件で多忙であり、今日ここには来られないという。「ただ、まだ守護霊はそこにいる。ムズングよ、おまえはやたらに霊の祀ってあるところをうろろうするから、彼の役目は終わってないだろう、ところで…」霊の声。「写真はおもってきたか」「申し訳ない、今回現像する時間がなかったんだ」

結局そのときもまた、壁の向こうを見せてほしい、とはオティンガにいえなかった。聞いたらあっさり見せてくれるかもしれない。調査としてはそのほうがいいのだろうが、私はなんとなく踏みとどまってしまった。人が半ば本気で信じているものの正体暴きをするものではないと思ったわけでもないのだが。そのときも写真を撮ったが、カメラに収まったのはオティンガだけであった。

次にオティンガにであったのは、彼の近所で人が亡くなり、カリエリ（葬式の儀礼の一つ。女達のミエリ（踊り）とキリスト教司祭によるミサ、埋葬が行われる）の席だった。死者に敬意を表するため、死者の亡骸に挨拶をすると、親族が写真を撮ってやってくれ、という。何枚か遺体の写真を撮って小屋から出るとオティンガを捜した。彼はもう自分の屋敷へ続く小道を下ろうとしている。追いかけて「ところで、あの儀礼小屋の…」とききかけたが、オティンガは挨拶もそこそこに「アトゥオ・ムスジャ（マラリアを患っている）」といった。彼はふらふらしながら、自分の小屋の中に消えていった。オベリ（ジャカラダのパドラ語名）の花が咲いていた。遠くにトロロ・ロックがかすんで見えた。

実は、オティンガ、というか彼の霊には、まだ写真を渡していない。その後、いろんなことがあった。本当にガーディアンに守られたのでは、と思うようなひやとしたことも二度ほどあった。写真を眺めながら、今度こそオティンガに壁の向こう側について聞いてみたい、と思うのだ。